

淡路島における海浜集落の成立と海人

多賀茂治

はじめに

瀬戸内海の東端に位置する淡路島は海の幸に恵まれ、古代には「野島海人」や「御原海人」とよばれた海人たちが活動していたことが知られている。しかしこれら淡路島の海人は『日本書紀』や『万葉集』など文献上の存在であり、近年までその具体像は不明であった。一九九〇年代以降、野島海人の本拠と推定される淡路市野島に所在する貴船神社遺跡^①、その南五kmに所在する富島遺跡^②、御原(三原)海人の本拠と推定される南あわじ市阿万に所在する九蔵遺跡^③の発掘調査が行われ、海人たちの具体的な活動が明らかになってきている。さらに紀淡海峡を隔てた紀伊北部でも海人の中核的な集落である和歌山市西庄遺跡の発掘調査がおこなわれ、膨大な遺構や出土品から海人の活動につ

いて研究が進められている^④。

本稿ではこれら海人と関係の深い遺跡の調査成果から、いつ・どのような経緯で海人の活動拠点となった集落が成立したのか検討する。なお海人が海浜部に形成した活動拠点については、生業から「製塩遺跡」「漁業遺跡」等と呼ぶ場合と^⑤、立地から「海浜集落」等と呼ぶ場合がある。本稿では継続的な居住を伴う集落の形成過程を重視する立場から、海浜部に立地し、居住や埋葬を伴い継続的に営まれる活動拠点を「海浜集落」と呼び、居住や埋葬を伴わず製塩や漁撈などの生産活動のみ行われる一時的な活動拠点を「製塩・漁撈キャンプ」と呼び分ける。

淡路島における海人の集落形成を通して、古墳時代から古代に活動した海人とは何者であったのか、王権・国家との関係を視野に入れ具体像に迫ってみたい。

一、淡路島における海浜集落の調査

(1) 貴船神社遺跡

播磨灘に面した淡路市野島平林の海岸に立地する。現状では海岸からの距離は約三〇mであるが、淡路島西岸は侵食により海岸線が後退しているのかつてはもう少し離れていた可能性がある。遺跡は海と丘陵の間にある幅八〇mほどの緩斜面上にあり、標高は四・六〜四・八mである。これまでに北淡町教育委員会・兵庫県教育委員会による調査が行われ、弥生時代から奈良時代に至る遺構・遺物が出土している。

この場所で人の活動が始まるのは縄文時代である。土器片がわずかに出土しているだけなので、具体的な活動については不明である。弥生時代になると遺物の出土量が若干増える。完形に近い中期後半の土器が出土しており、この時期に海浜部でなんらかの活動があったことを示す。コップ形のイイダコ壺が少量出土しているので、漁撈活動がおこなわれた可能性もある。弥生時代後期の土器はほとんど出土しておらず、この時期に出現す



図1 関連遺跡の位置（地理院地図に加筆）

る脚台Ⅰ式製塩土器^⑥がわずかに出土している。またまとった遺物が出土するのは弥生時代終末期^⑦である。淡路型甕や淡路型器台などの特徴的な土器を含み、脚台Ⅱ式製塩土器が出土している。明確な遺構はないが、この時期から本格的に土器製塩が始まっている。

古墳時代になるとしばらく遺物量は少なく、三世紀から四世紀の製塩土器である脚台Ⅲ式はわずかな点数しか出土していない。五世紀前半までの場所での活動は低調であり、再び活発化するの場は五世紀後半以降である。この時期の須恵器・土師器とともに、丸底Ⅰ式製塩土器が出土する。北



図2 貴船神社遺跡の位置（地理院地図に加筆）

淡町確認調査No.六調査区では丸底Ⅰ式製塩土器のみが多量に出土した遺構SⅩー〇一が調査されており、この時期から明確な遺構が見られるようになる。石敷製塩炉のうちSⅠー〇はこの時期まで遡る可能性がある。六世紀に入ると丸底Ⅱ式製塩土器が出土するが、出土量は丸底Ⅰ式よりやや増える程度である。六世紀後半から七世紀前半になると丸底Ⅲ式製塩土器が大量に出土し、これに伴



図3 古墳時代後期から飛鳥時代の貴船神社遺跡（註1文献の図に加筆）

う製塩炉が多く造られる。北淡町確認調査No.六調査区では竪穴住居の可能性があるSX10三、北淡町調査B地区で六世紀後半から末のカマドを持つ竪穴住居SH10一、県調査区で六世紀後半の竪穴住居SX0五、七世紀初頭の竪穴住居SH0二が調査されており、六世紀後半から末頃には確実に居住が始まっている。

また県調査区で石棺墓ST0一が調査されている。丸底Ⅲ式製塩土器が出土しているので六世紀後半以降のものである。遺跡の北部に墓域、南部に居住域があり、その間に製塩炉が密集している。この他の古墳時代の出土遺物としては、イイダコ壺や土錘・釣針といった漁撈具、鉄鎌・刀子・斧・鎌・帯金具などの各種鉄製品がある。

これ以降のものとしては県調査区で奈良時代の竪穴住居SH0一が調査されており墨書土器も出土しているがこの他に明確な遺構はない。遺物も丸底Ⅳ式製塩土器や須恵器などが出土しているが量はわずかである。

以上をまとめると縄文時代から弥生時代中期に散発的な人の活動があり、弥生時代終末期に土器

製塩がおこなわれる。古墳時代は五世紀前半まで人の活動は低調であり、五世紀後半から製塩活動が活発化してくる。六世紀後半から七世紀初頭にかけて居住域、墓域、生産域（製塩作業場）を伴う海浜集落が成立し、製塩活動がピークを迎える。奈良時代まで居住が続き海浜集落が維持されるが製塩活動は低調となる。

(2) 富島遺跡

近世以前は机浜村、机浦と呼ばれた海村であった淡路市富島に所在する遺跡である。現在の海岸線からは一〇〇mほど離れているが、遺跡内に谷状の低地があるのでかつては入江状に海が入り込んでいた可能性がある。阪神・淡路大震災からの復興のため実施された区画整理事業に伴い、北淡町教育委員会・淡路市教育委員会・兵庫県教育委員会によって発掘調査がおこなわれ、縄文時代から江戸時代に至る遺構・遺物が出土している。街路整備や擁壁工事に伴う小規模な調査であるが、遺跡全体に調査が及んでいるため、集落の全体像を推測することが可能である。

この場所で人の活動が始まるのは縄文時代後期であり、遺跡の西部を中心に後期から晩期の土器や遺構が出土している。遺構は土坑のみであり居住の痕跡は確認されていない。これに続く弥生時代は前期から終末期の土器が出土しており、中期

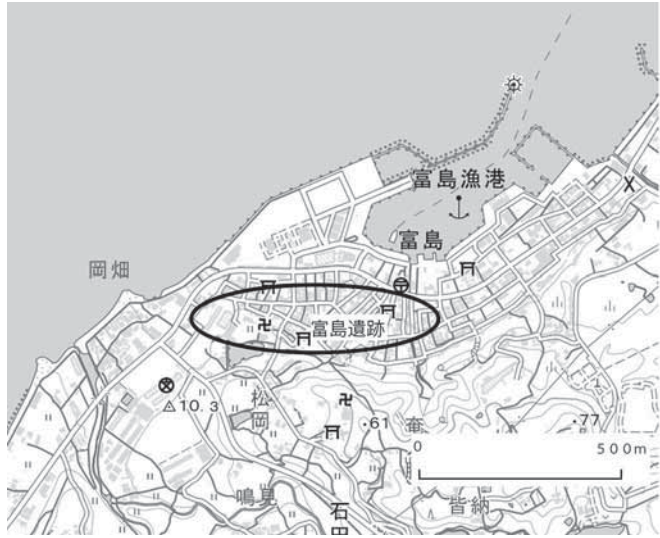


図4 富島遺跡の位置（地理院地図に加筆）

の土器がまとまって出土した土坑も確認されている。ただし遺物の出土量は少なく、この時期においても居住の痕跡は確認されていない。脚台Ⅰ式製塩土器が出土しているので、弥生時代後期から終末期の間に土器製塩が始まっている。コップ形イイダコ壺にタタキ成形のものであるので、イイダコ漁もこの時期に始まったのであろう。古墳時代になっても遺物の出土量は少ない。三〜四世紀の土師器はわずかであり、この時期の脚台Ⅲ式製塩土器も少量である。遺物・遺構が増えるのは古墳時代後期からである。遺跡東部の一四号線―五区で六世紀中葉から後半のカマド付竪穴住居が一棟、これに近接して七六街区―市五区でも詳細な時期は不明であるが古墳時代後期の竪穴住居一棟が調査されており、この時期から居住が始まったことを物語る。三三号線―五区では古墳時代から奈良時代と推定される掘立柱建物が調査されており、古墳時代にまでさかのぼるものが存在した可能性がある。

またこの時期の石棺墓が遺跡西部の三三号線―一区で一基、一〇号線―四区で三基、一〇号線―

一七区で一基、一〇号線一市二区で一基調査されている。近接しているので一つの墓域内に造られたものである。いずれも副葬品はなく、三三三号線一一区石棺1から装着された耳環が一点出土し

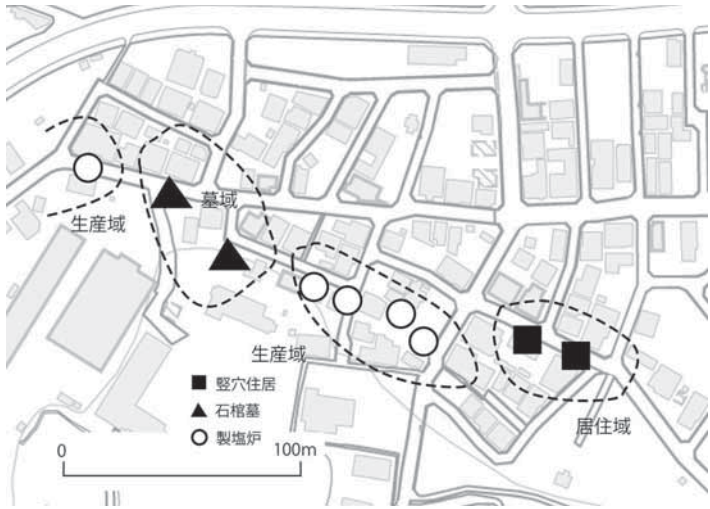


図5 古墳時代後期から飛鳥時代の富島遺跡（地理院地図に加筆）

ている。時期を決める手がかりは少ないが、一〇号線一市二区から田辺編年TK二〇九〜二一七型式の須恵器が出土しており、七世紀前半のものと推定されている。他の石棺墓もこれと前後する時期のものである可能性が高い。

古墳時代後期には製塩活動も活発化する。土器製塩の再開は丸底Ⅱ式製塩土器の段階であり、六世紀後半以降の丸底Ⅲ式製塩土器の段階になるとさらに出土量が増加する。製塩炉は居住域と墓域に挟まれた範囲を中心に確認されている。三三三号線一一区では石敷炉一基と石囲炉二基、七八街区一六区では石敷炉一基、一〇号線一一区では石敷炉五基以上、七七街区一二区では石敷炉三基以上が調査されており、この他に製塩炉の可能性もある集石が多数ある。製塩炉の時期を特定できるものはないが、丸底Ⅱ式Ⅴ式を伴うものがあるので、古墳時代後期から奈良時代のものとして推定されている。この他にも古墳時代のイイダコ壺や土鍾があり、製塩とともに漁撈活動も活発化していたことが伺われる。

これに続く飛鳥時代から奈良時代にかけての遺

構、遺物も多く認められる。調査区が狭いため建物として復元するのは困難であるが、この時期の柱穴が多数調査されている。この他、製塩炉の一部もこの時期まで下がる可能性がある。出土遺物は丸底Ⅳ式製塩土器、イイダコ壺、マダコ壺、土錘など製塩・漁撈活動に関するものが多いが、「田家」の墨書がある須恵器や土馬、瓦などいわゆる官衙的な遺物も出土している。以後、中世・近世と集落は継続してゆく。

以上をまとめると、縄文時代後期から古墳時代前期までは散発的な人の活動があるが、集落が形成されるのは居住域・墓域を伴うようになる古墳時代後期後半（六世紀後半）以降であり、その主たる生業は製塩、漁撈である。集落は墓域、居住域、生産域（製塩作業場）で構成されるが、規模は小さい。奈良時代にも律令国家による地方支配の末端をになう公的性格を帯びた海浜集落として存続する。

（3）九蔵遺跡

紀伊水道に面した南あわじ市阿万東町に所在す

る遺跡である。遺跡中心部^⑩で海岸線から約五〇〇m離れており海に臨む立地ではないが、製塩土器が出土するなど海浜での生産活動を活発にこなっている。これまでに兵庫県教育委員会、南あわじ市教育委員会による調査が行われており、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が出土している。

ここで人の活動が始まるのは縄文時代であり、後期から晩期の土器や遺構が出土している。続く弥生時代には前期後半から中期前葉（Ⅱ様式）の竪穴建物が調査されており、居住が始まったことが伺われる。同時期の遺構は九蔵遺跡の北一・五kmにある南あわじ市井手田遺跡^⑪でも確認されており、この地域が淡路島南部における弥生文化流入の窓口となっていたと考えられる。この時期の海での活動の証拠は乏しいが、井手田遺跡における紀伊型甕の出土や松菊里型住居の存在など紀伊北部との交流を示す事象から、紀伊水道を挟んだ海上での活動が想定できる。しかしこの集落は継続せず、以後弥生時代後期〜終末期頃の竪穴建物がわずかに見られるが、安定した集落には成長しない。

古墳時代に入っても人の活動の痕跡は乏しい。三世紀から四世紀の脚台Ⅱ式・Ⅲ式製塩土器がわずかに出土しているが、この時期の日用土器はほとんど出土していない。再び集落として成長を開始するのは古墳時代後期から飛鳥時代である。県調査区四区では四棟の竪穴住居が確認されてお



図6 九蔵遺跡の位置（地理院地図に加筆）

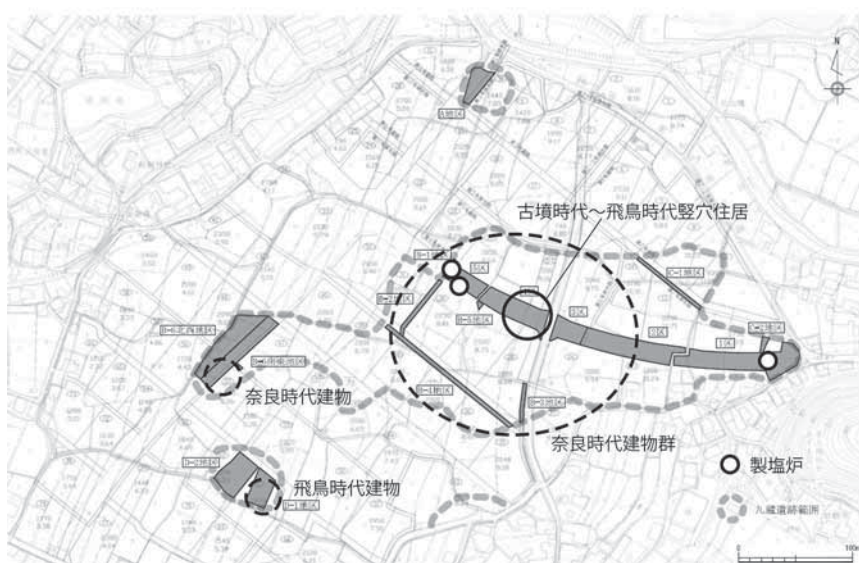


図7 古墳時代後期から奈良時代の九蔵遺跡（註3文献の図に加筆）

り、時期の確実なSH〇四は七世紀初頭のものである。市調査区B―四区などで丸底Ⅲ式製塩土器が出土していることから、この時期には製塩活動も活発化するようである。飛鳥時代の遺構・遺物はほかに市調査D―一区などで確認されている。

奈良時代に入ると集落はさらに成長する。既調査範囲だけで三〇棟以上の掘立柱建物があり、二〇〇kg以上の丸底Ⅳ式製塩土器が出土している。製塩炉も確認されており、ここが淡路島南部における海浜生産活動の中心の一つとなる。ただしイイダコ壺や土錘などの漁撈具の出土はわずかであり、その生業は製塩に偏っている。また墨書土器、瓦、和同開珎銀錢など、いわゆる官衙的な遺物が多数出土しており、ここが律令国家による地方支配において重要な役割を担う公的な性格を帯びた海浜集落であったことを物語っている。

平安時代に入ると製塩活動は行われなくなり、集落としては一時衰退する。中世に入ると再び集落が営まれるが、漁撈具など海での生産活動にかかわる遺物は伴わず、海浜集落としての性格は失われている。

以上をまとめると、縄文時代後期から人の活動が見られ弥生文化の伝播とともに農耕集落が形成されるが、安定的な集落としては継続しない。古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて製塩を主たる生業とする海浜集落が形成され、以後奈良時代まで継続するが、漁撈活動は活発ではない。奈良時代の集落は官衙的な性格を持ち、律令国家による地方支配を担う海浜集落であった。

二、淡路島における海浜集落の成立と展開

海人と関係の深い淡路島の三つの遺跡について、海浜集落として成立する過程を比較してみよう。いずれの遺跡においても縄文時代から人の活動が始まる。縄文人の活動について詳細なデータが得られた淡路市佃遺跡の調査成果を参考にすると、海浜部の縄文集落では漁撈、狩猟、採集という多様な生業に従事し、山海の資源を最大限に活用していた。三つの集落における活動の痕跡はこのような縄文人の多様な生業のうち海浜での漁撈、採集活動の痕跡である。

弥生時代の様相はそれぞれの遺跡で異なる。貴船神社遺跡と富島遺跡では弥生時代後期から終末期頃に土器製塩が始まり海浜における活動拠点として機能し始める。しかし居住の痕跡はなく、製塩や漁撈など海浜生産活動に伴い一時的に滞在する製塩・漁撈キャンプ段階のものである。この時期における淡路島北部の中核集落は丘陵上にある淡路市舟木遺跡と目されるが、^⑩ここでは製塩土器、イイダコ壺、釣針、ヤスなどの漁撈具が出土している。農耕、漁撈、冶金など多様な生産活動をおこなったこの中核集落の製塩・漁撈活動に伴い形成されたのが、貴船神社遺跡や富島遺跡であろう。これに対し九蔵遺跡では弥生時代前期後半から中期前葉にかけて集落が形成され、早い時期に居住が認められる。これは先の二遺跡が農耕に不適な臨海部に立地するのに対し、九蔵遺跡が海岸からやや離れた河川流域の農耕適地に立地するという条件の違いによるものである。それゆえ弥生時代後期から終末期においても製塩・漁撈キャンプではなく居住を伴う農耕集落として存在している。この地域の製塩・漁撈キャンプは未確認であ

るが、海岸に近い砂堆近辺に存在する可能性があるだろう。

古墳時代に入り、五世紀前半まで人の活動が極めて低調であることは三つの遺跡とも共通しているが、その後の展開は遺跡ごとに少しずつ異なる。貴船神社遺跡では五世紀後半、丸底Ⅰ式製塩土器による土器製塩が始まり、六世紀後半の丸底Ⅲ式製塩土器段階で製塩活動が飛躍的に活発化する。富島遺跡では貴船神社遺跡より若干遅れて、六世紀の丸底Ⅱ式製塩土器の段階から土器製塩が始まり、六世紀後半の丸底Ⅲ式製塩土器段階で活発化する。九蔵遺跡では六世紀後半、丸底Ⅲ式製塩土器の段階から製塩活動が始まる。このように古墳時代における丸底式製塩土器による製塩活動の開始時期は遺跡によって異なるが、堅穴住居を伴い居住が確実に確認できるようにするのはいずれの遺跡でも六世紀後半から七世紀初頭にかけてである。さらに貴船神社遺跡、富島遺跡では同時期に石棺墓からなる墓域が形成される。この時期に製塩・漁撈キャンプの段階を脱し、常時海浜に居住し製塩・漁撈活動に従事する海浜集落が成立した

と言える。

いずれの遺跡も奈良時代まで継続するが、その内容はかなり異なる。丸底Ⅳ式製塩土器による製塩活動をおこなうという点は共通するが、貴船神社遺跡では製塩活動は低調となり、集落としては衰退に向かう。これと反対に富島遺跡では製塩活動とともにイイダコ壺漁などの漁撈活動が活発におこなわれ、遺構も多く確認されている。また墨書土器や土馬などの官衙的な遺物が出土することが特筆される。奈良時代において最も成長するのは九蔵遺跡である。整然と並ぶ掘立柱建物、多くの墨書土器・和同開珎銀銭の出土など、富島遺跡を上回る内容の集落となるが、製塩以外の漁撈活動は低調であり、漁村的な性格は乏しい。

以上をまとめると、弥生時代後期から終末期に中核集落の製塩・漁撈を担う活動拠点として臨海部に製塩・漁撈キャンプが営まれるようになり、古墳時代後期から飛鳥時代（六世紀後半～七世紀初頭）に製塩活動が活発化するとともに居住や埋葬を伴う海浜集落が成立する。奈良時代になると九蔵遺跡のような製塩活動を主とし律令国家によ

る地方支配の拠点となる海浜集落、富島遺跡のような製塩・漁撈活動を活発におこなう海浜集落という階層性が生じている。

三、大阪湾岸における海浜集落の成立と展開

淡路島において見出された海浜集落の成立と展開の様相が普遍性を持つものなのか、それとも淡路島だけの特殊なものなのか、淡路島とともに大阪湾岸^①における主要な海浜集落の所在地である紀淡海峡地帯における調査例と比較してみよう。

紀淡海峡地帯では同志社大学の調査^②によって早くから漁撈具や製塩土器が出土する海浜部の遺跡（報告書では「古代漁業遺跡」）の存在が知られており、大阪府岬町小島東遺跡^③、同小島北磯遺跡^④、同山田海岸遺跡^⑤など製塩活動を主とする遺跡の調査がおこなわれている。さらに最初に述べたように和歌山市西庄遺跡では古墳時代中期から後期を中心とする大規模な海浜集落が調査されており、詳細な研究が進められている。

小島東遺跡・小島北磯遺跡・山田海岸遺跡はい

時期	製塩土器	紀淡海峡地帯				淡路島				
		小島東	小島北磯	山田海岸	西庄	貴船神社	富島	九蔵		
弥生時代	後期	脚台Ⅰ式	○	○			○	○		
	終末期	脚台Ⅱ式	○	◎	○	○	◎	○	○	
古墳時代	前期	脚台Ⅲ式	○	○	○	○	○		○	
		脚台Ⅳ式	○	○	○		○			
	後期	丸底Ⅰ式	◎	○		◎	○			紀淡海峡地帯における 海浜集落の成立
		丸底Ⅱ式			○	◎	○	○		淡路島における海浜集落の成立
飛鳥時代			◎	○	◎	◎	○			
奈良時代			◎	◎	○	○	○	◎		

◎ 製塩活動の活発な段階

製塩・漁撈キャンプ

海浜集落

図8 大阪湾岸における製塩活動と海浜集落の成立

いずれも海岸に面した狭小な場所に立地する。弥生時代から奈良時代まで幾度か活動の低調な時期を挟みながら継続しているが、各遺跡ともに居住は認められず、製塩・漁撈キャンプの段階でとどまっている。

これに対し西庄遺跡では弥生時代終末期の脚台Ⅱ式段階から製塩活動が始まるが、この段階は他の遺跡同様、居住を伴わない製塩・漁撈キャンプである。古墳時代の四世紀末から五世紀初め頃から居住が始まり、海浜集落が成立する。五世紀中葉から後葉に製塩・漁撈活動のピークを迎え、六世紀になると居住域に隣接して墓域が形成される。飛鳥時代、奈良時代の遺物はわずかに出土しているが居住は認められず、海浜集落としては衰退が著しい。

紀淡海峡地帯と淡路島を比較すると、紀淡海峡地帯では五世紀には海浜集落が成立しており、六世紀後半に成立する淡路島よりも大きく先んじている。また紀淡海峡地帯では古墳時代中期から後期に海浜集落と製塩・漁撈キャンプが併存し、奈良時代の公的性格を帯びた海浜集落が見られない。

このように淡路島と紀淡海峡地帯ではいくつかの違いがあるが、製塩活動が活発となる時期に海浜集落が成立すること、墓域を伴うのは古墳時代後期からであること、といった共通点も認められる。

四、海浜集落成立の背景

淡路島における海浜集落の成立と展開を検討した結果、この地域の海浜集落は弥生時代後期から終末期に中核集落における漁撈・製塩などの海浜生産活動のため営まれた製塩・漁撈キャンプを起源に、六世紀後半から七世紀初頭頃に成立したことが明らかにされた。その契機となったのは製塩活動の活発化であり、古墳時代から奈良時代に至る海浜集落の存立にとって製塩は重要な生産活動であった。奈良時代の事例であるが海浜集落の住人⇨海人と製塩との密接なかわりは、海人を題材とする多くの万葉歌に「塩焼く」という形容が付くことが示している¹⁶⁾。また平城京から出土した淡路の調塩の荷札木簡には、津名郡育幡郷や三原郡阿麻郷などの地名とともに「海」「海部」の名

が記されており、塩が海人にとって重要な生産物であったことを示している¹⁷⁾。

古代の海人が釣漁・網漁・イイダコ漁・潜水漁などの漁撈活動に従事していたことは遺跡からの出土遺物が示しており、『日本書紀』の記述からは航海者、時には戦士としての役割にも従事していたことが伺われる。しかし漁撈活動は対象魚類の季節的な変化や周期的な資源量の変動など不安定な要素が多く、また航海や戦闘は臨時的なものであるため、これらを生業として継続的に同一場所では生活維持する⇨集落を維持することは容易ではない。臨海部という農耕不適な土地で集落を維持するには、農耕集落における水稻耕作に相当する安定した生業が不可欠である。

その生業が無尽蔵にある海水を原料とし、燃料である薪が枯渇しない限り安定した生産が可能な製塩であった。塩は古墳時代の倭王権、古代の律令国家にとって重要な物資であり、その生産に王権や国家の関与があったことが多くの先学により指摘されている¹⁸⁾。本稿で明らかにしたように海浜集落の成立は製塩活動と深く結びついており、王

権や国家の製塩活動への関与を契機として、海浜集落が成立した可能性が考えられる。

海人にとって豊かな資源を蔵する海近くに集落を形成することは、製塩や漁撈という海浜生産へ特化することを可能にし、生産効率の向上、生活の安定を期待できる。一方王権・国家にとって、海人が安定した集落を形成し特定の土地との結びつきを強めることで、航海等の特殊な技術を有する海人を集団として掌握することが容易になる。海浜集落の成立は海人と王権・国家の双方の必要性が背景にあり、それが王権・国家が必要とした塩の生産を海人が担うことによつて実現されたのではないだろうか。

おわりに

本稿では淡路島における海浜集落の成立時期が六世紀後半から七世紀初頭であることを明らかにし、その背景に王権・国家による製塩活動への関与を想定した。さらに推論を重ねれば、国家形成期にあたるこの時期に淡路島の海人が塩生産を通

じて王権・国家のもとに編成された可能性も考えられる。『日本書紀』には応神朝や仁徳朝など五世紀から「野島海人」ら淡路島の海人が倭王権と深い関りを有していた記述があるが、海人たちが残した遺跡にはこの時期における王権とのつながり示す明確な証拠は見当たらない。淡路島の海人が王権との関係を深めるのは、海人の拠点である海浜集落が成立し、その姿が明確になる六世紀後半以降に下る可能性も考えられよう。

このように古墳時代の淡路島については文献資料の記述と遺跡の状況に不整合があり、未だ明確な時代像が描かれていない。集落と古墳の調査成果から再考する必要性を感じている。淡路島には南あわじ市沖ノ島古墳群など海人の墓と目される古墳が知られている。海人の残した集落と古墳の双方から王権と海人の関係を解明することで、淡路島の古墳時代像がさらに豊かなものになるだろう。今後の課題としておく。

(1) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『貴

船神社遺跡』(兵庫県教育委員会、二〇〇一年)

津名郡町村会編『貴船神社遺跡(製塩遺跡) 平

林地区土地改良総合整備事業に伴う発掘調査報告書』(北淡町教育委員会、二〇〇二年)

(2) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『富島遺跡』(兵庫県教育委員会、二〇〇七年)

淡路市教育委員会編『富島遺跡発掘調査報告書第九次く一八次発掘調査報告書』(淡路市教育委員会、二〇一二年)

(3) 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部編『九蔵遺跡』(兵庫県教育委員会、二〇一五年)

南あわじ市埋蔵文化財調査事務所編『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅱ 二〇〇五年度埋蔵文化財調査』(南あわじ市教育委員会、二〇〇九年)

同『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅲ 二〇〇六年度埋蔵文化財調査』(南あわじ市教育委員会、二〇一〇年)

同『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅳ 二〇〇七年度埋蔵文化財調査』(南あわじ市教育委員会、二〇一一年)

同『南あわじ市埋蔵文化財調査年報Ⅴ 二〇〇八年度埋蔵文化財調査』(南あわじ市教育

委員会、二〇一二年)

同『九蔵遺跡Ⅰ』(南あわじ市教育委員会、二〇二〇年)

(4) 財団法人和歌山県文化財センター編『西庄遺跡』(財団法人和歌山県文化財センター、二〇〇三年)

紀伊考古学研究会「特集 海浜集落からみた王権と地域」(『紀伊考古学研究』二七、二〇二四年)

など

(5) 海辺に立地する遺跡からは製塩土器、土錘やタコ壺等の漁撈具などが出土しており、海を生産域とした多様な生業が想定される。「製塩遺跡」、「漁業遺跡」という名称は専門化を想起させるため、本稿では使用しない。

(6) 製塩土器の型式名は次の文献に拠る。

伊藤宏幸「古代淡路島の土器製塩研究の現状と課題」(『ひょうご歴史研究室紀要』七、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室、二〇二一年)

(7) 本稿における時期区分については、弥生時代

は前・中・後・終末の四期区分とし、庄内式併

行期を終末期とする。古墳時代については前・

中・後の三期区分とし、その後に飛鳥時代・奈良時代を置く。三世紀く八世紀という実年代も

併用するが、須恵器の田辺編年TK四七型式を

五世紀末～六世紀初頭としこまでを中期、同TK二〇九型式を七世紀初頭としこから飛鳥時代とする。

(8) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『佃遺跡』(兵庫県教育委員会、一九九八年)

(9) 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部編『井手田遺跡』(兵庫県教育委員会、二〇一八年)

(10) 淡路市教育委員会編『舟木遺跡1・B・D地区の調査』(淡路市教育委員会、二〇二〇年)

(11) ここで言う「大阪湾岸」とは、大阪湾を取り囲む摂津・和泉・淡路・紀伊北部を含む領域のことであり、大阪湾に面さず播磨灘や紀伊水道に面する遺跡も「大阪湾岸」に含めている。

(12) 森浩一編『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』(同志社大学文学部文化学科、一九六八年)

(13) 財団法人大阪府埋蔵文化財協会編『脇浜遺跡発掘調査報告書』(財団法人大阪府埋蔵文化財協会、一九八六年)

(14) 財団法人大阪府文化財調査研究センター編『小島北磯遺跡』(財団法人大阪府文化財調査研究センター、二〇〇〇年)

(15) 財団法人大阪府埋蔵文化財協会編『山田海岸

遺跡発掘調査報告書』(財団法人大阪府埋蔵文化財協会、一九八九年)

(16) 「須磨の海人の塩焼き衣のなれなばか 一日も君を忘れて思はむ」山部宿禰赤人(巻六・九四七)など

(17) ・淡路国津名郡育播郷二見里人大戸主海

・稲村戸同姓三田次調三斗

(平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構(北)二〇四次SD五三〇〇)『平城宮発掘調査出土木簡概報』二四(奈良国立文化財研究所、一九九一年)

・淡路国三原郡阿麻郷戸主海部□麻呂戸同姓嶋万呂調塩三斗

□ 平寶字五年十月四日

(平城京内裏東方官衙地区二一次SD二七〇〇)

『平城宮発掘調査出土木簡概報』三八(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、二〇〇七年)

(18) 広瀬和雄「大阪府」(『日本土器製塩研究』、近藤義郎編、一九九四年)

積山洋「大阪湾岸の古墳時代土器製塩」(『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊一四、雄山閣、二〇〇四年)など